

研究会通信

第22号平成12年7月30日
(社)青少年健康センター・登校拒否研究会
〒233-0013 横浜市港南区丸山台2-26-20
TEL045-848-3761代Fax045-848-3742
<http://member.nifty.ne.jp/KYOKEN/>

「登校拒否研究会」から「不登校問題研究会」に来年度から名称を変更します。 登校拒否という用語から不登校という名称への変化にともない会の名称も時代にあった名前に変更していくことになりました。長年、使い慣れた名称から新しい名称に変わることは寂しさがとのないますが、研究会も10年目を無事に終え、2001年からは新しい名称で今日の教育問題を初心に帰り取り組もうと考えています。不登校の問題は本人自身の問題、家庭のあり方、地域教育の問題、学校教育の問題など、様々な問題が複雑に絡み合いながら〈不登校現象〉があるといえます。不登校問題から様々な〈教育課題〉を考へ明日の子ども達のためにがんばろうと思います。今後ともこの問題をご一緒に考えていき、実践に活かしていきましょう。

平成12年度夏期セミナー

「教師&専門家のための登校拒否研修会」

平成3年にスタートした教師&専門家のための登校拒否研修会も今年で10年目を迎えました。

今年は、不登校の抱える本質的な問題を子どもの視点から見ていくことをひとつのテーマとして体験者を招いてのシンポジウムを計画しました。多くの皆様のご参加をお待ちしています。

8月21日(月)

「不登校問題等に対する教育行政の取り組み」
文部省初等中等教育局

中学校課生徒指導専門官 笹井 弘之
いじめ・不登校・学級崩壊、校内暴力など、学校は今様々な問題を抱えている。行政として、様々な調査結果を踏まえ、教委・学校における取り組みについて考える。

『問題を投げかけている子ども達への福祉的対応』

厚生省児童家庭局家庭福祉課

児童福祉専門官 相澤 仁

児童虐待から不登校問題など、今日の家庭は様々な問題を抱えている。児童相談所は児童家庭福祉の立場から具体的な援助活動をしている。行政の取り組みを紹介する。

シンポジウム

『不登校経験者から感じた学校・家庭の対応』

コーディネーター

NHK 週刊子どもニュースキャスター 池上 彰

様々なタイプの不登校経験者3名~4名

助言者 教育研究所所長 牟田 武生

様々なタイプの不登校経験者から体験談を聞く。彼らが感じた家庭・学校の対応のあり方を聞き、タイプ別の対応のあり方を一緒に考える。増えつづける不登校に対して明日への援助の手がかりを探る。

8月22日(火)

基調講演

『追跡調査から見た今日の不登校現象』

大阪市立大学教授 森田 洋司

平成5年度中学卒業生のうち不登校生徒二万六千人全員の追跡調査による豊富なデータから「不登校現象とは何か」、社会学者の第一人者がシャープに不登校現象を分析し、今日の不登校問題を考える。

※追跡調査の文部省発表の時期により、若干内容が変更されることがあります。

『荒れる学校と少年法改正』

筑波大学名誉教授

早稲田大学教授 下村 哲夫

荒れる学校・様々な問題行動に走る子ども達、その中で問われる少年法改正問題を教育法の第一人者が鋭く講義する。

『教師が取り組む不登校』

～不登校対応チャートによる指導』

国立特殊教育総合研究所

情緒障害教育研究室長 花輪 敏男
不登校に対する学校（教師）の具体的な取り組み方を「不登校対応チャート」に基づいて述べる。

8月23日(水)

『社会的ひきこもりの理解と対応』

(社) 青少年健康センター理事

(医) 北の丸クリニック所長 倉本 英彦

「ひきこもり」の子ども達が増え、様々な非社会的・反社会的な問題行動を起こしている。ひきこもりの臨床医の第一人者が「ひきこもり」の子どもとのつき合い方を講義する。

『不登校の心理・予防・再登校への援助』

国際学院埼玉短期大学教授

附属教育相談研究センター所長 金子 保

不登校問題の第一人者より、不登校の心理に即した予防法と再登校への援助のあり方をプログラム手法に基づき講義する。

『不登校、子どもの状態像に即した対応』

新潟大学名誉教授・仙台白百合女子大学教授

石郷岡 泰

大学の研究者であると同時に、臨床の場に常に身をおいてきた臨床家でもある。専門の社会心理学を背景に子どもの状態像にそくした対応のあり方を考える。

＝不登校雑感＝

登校拒否から不登校

この10年間をふりかえって。

登校拒否研修会 幹事 牟田 武生

「登校拒否研修会」も今年で10年目、10回目になった。

10年で一区切りと考えていた。この10年間に”登校拒否”という名称が”不登校”になった。少子化の中、子どもの数は減少する一方なのに、高校中退・小中学生の不登校児童・生徒は増加している。それ以外に、青少年の”ひきこもり”や凶悪な犯罪が急増している。質的にも犯罪を起こしたことの無いのに、いきなり大きな事件をひき起こす青年の増加という新たな事態が起こっている。

これらの事件に共通する、キーワードとして、『人間関係の希薄化』『いじめ』『不登校』『仮想社会と現実社会の区別がつかない』『ストレス』『母子密着』『友達親子』『父性不全家族』『TVゲーム』『子ども総ぐるみタレント化』

『ナイフと金属バット』『ひきこもり』『アニメとコスプレとセーラー服』が浮かんでくる。子どもを巻き込む、商業主義の波が情報化社会と共にやって来ている。その波に洗われて人間関係の絆としての家庭や地域社会は崩壊を早めていく。幼少年期、群をなして遊ぶ体験に乏しく、アニメ・TVゲーム・TVで育った子ども達は十分な人間関係のスキルを身につけずに育った。おしよせる様々なストレスの波に、悪にもなれず、ひたすら耐える。やがて「何故、僕だけが・・・」という被害妄想から生まれるのは「いつか、見返してやる」という共通の感情ではないのか？「いきなり凶悪犯罪」は犯罪を犯すという認識ではなく、否定され続けた自分の存在そのものを実存的に証明する行為だとするならば、彼らもこの物質を中心の商業主義経済社会の被害者かもしれない。

「ひきこもり」は不登校の子どもだけでなく、大学生社会人にも拡がりつつある。「一人でいるほうが楽」「人に気を使うのは嫌だ」一人で遊べる時代、情報化時代は「好きな時」に「好きなものを」「どこでも」手に入れられるという生活の質の変化をもたらした。何も退屈させるものはなく、ITを通して、見知らぬ人とメールのやり取り、『見知らぬ人だからいいのだ。深いかかわりがないから、仮面の自分でいられる。そのほうが楽だ』と、若者達は言う。

「いじめ」「不登校」「ひきこもり」「高校中退」教師や相談者・親が対応に悩んでも、社会環境や人間社会への貢献という認識の薄い現代日本の商業主義経済社会全体の傾向ならば、結局は流されていくだけなのかもしれない。

昨年9月、総裁選の時、加藤紘一氏（元自民党幹事長）が日本の将来と問題点の勉強ということで、本人いわく、弱点である教育問題の中で”不登校”を理解しようと、衆参両議員数名とともに、私どもの”教育研究所、”の視察と不登校の子ども達と話をするために来られた。9月の暑い中でもあるし背広姿だと「父親をイメージして、子どもも緊張するからということ」と当日が日曜日だったので、平服（スポーツシャツ）で来てくださいと注文した。多くの報道陣とともに、やって来た加藤紘一氏と話した。

”不登校とはいったい何でしょうか？”が加藤氏の第一声だった。牟田：「不登校問題は基本的には人間関係の問題で、単に本人、家族、学校の問題ではないと思う。会社にすいとられた父親、その分母子密着や友達親子の出現、学歴社会の中で学校のブランド化が進み学歴競争は幼児期においても塾や習い事が多くなり、

子供同士が自由に遊ぶ時間の減少や少子化社会のため、人間関係の力の土台が育たないことではないか。さらに利益運命共同体であった地域社会が現代社会ではほとんどの人が勤労者になり、社会全体が会社管理社会に変化していく。かつての地域社会は、そこには肩を寄せ合って生きる必要がないから地域の団結力や教育力の低下が同時に起こっている。」加藤：「自民党の地盤低下ともつながっているね」牟田：「人間関係を育み家庭・地域社会を作るには、まず安心して子育てができる地域環境を作ること、父親を家庭や地域に戻すために、余裕のある労働環境を作ることが大切ではないんでしょうかね。」加藤：「そうか！やっぱりそうか！地域社会をNPOを含めて活性化することがやっぱり重要だなあ、教育基本法や少年法の改正しても、根拠がしっかりしていないとねえ、やっぱり、競争社会や学歴社会は色々な社会矛盾をそのままにしてきたんだね」

その後、子ども達と1時間あまり、「学校のこと」「家族のこと」「社会のこと」を話して「みんなはよく考えているね！」やっぱり、生の声を聞かないと見えてこないね、よかった。」と言って、帰っていった。彼にとって、総裁選の視察の中で、一番印象に残ったこととして、新聞にそのあと書かれていた。

これだけ不登校問題が一般化してくると、マニュアル化対応が進む。カウンセラーは受容中心の「待ちましょう。様子をみましょう。」対応が中心になり子どもの心は肯定的になるが、一步、学校や社会に踏み出す勇気ももてず、その為確実に長期化していく。カウンセラーは心から受容することで、動き出すというが、その根拠はみあたらない。現実には、その為長期化し不登校の増加につながっている場合が多い。一方、医療領域においても、境界例の症状をもつ不登校の子どもに精神疾患と同じ投薬の仕方をしている。精神病と同じ投薬療法の結果、状態像の悪化と医療不信からさらに人間不信になり、「ひきこもり」が長期化しているケースが数多くある。厚生省は早く、児童精神科と精神科と分けるべきであり思春期の精神医療を充実させないとさらに混乱を強めていくと考えられる。その為には神経症などの境界例について、研究予算を取り、子どもの神経症や摂食障害等の治療方法についての研究を本格的にはじめてほしい。

民間教育機関では、「不登校」現象を経済的なチャンスと考えている。少子化とともに、子どもの数が減少し、予備校や塾はターゲットを広げ、幼児教育から障害児教育まで取り組もう

としている。取り組むこと自体は悪くないが、「不登校に関しては」まだ、タイプ別の分化も、対応の方法もまだ、確立していない状況の中でそれをビジネスチャンスとして考え、中学校卒業後の受け皿になろうとしている感がある。しかし、実際には民間のサポート校より、普通の高校の方が多くの卒業生を出しているデータがある。(当研究所受け入れ調査)不登校に関して学校教育はすでに30年近く調査も研究もしている。民間は不登校生徒や高校中退者が10万人に達した頃からビジネスになると考え、動き始めている。だから、高校中退者向けの大検予備校で10年、不登校生で4~5年である。「ビジネス」チャンスに見られた不登校生は、一年分の授業料、入学金を含めて、百数十万円払ったにもかかわらず、毎年「5,6月」にはサポート校に行けなくなり、多くの子どもがやめている。そのために、親に余計な負担をかけたという、自責の念から本格的な「ひきこもり」に入る例も多い。

この10年「不登校」の子ども達の環境は大きく変化しつつあるが、根元の部分、すなわち、「不登校の子ども達の心」の部分のきめの細かい対応は進んでいると思えないし、かえってかかわる人が多くなったことで失敗例も増えるだけで、その結果「ひきこもり」も臨床現場で見ると限り深刻化してきている。教育委員会主催の校内研修や生徒指導担当者の研修に講師として行き、先生方の話を聞くと、不登校になった在籍者の子ども達の心の状態像を理解するということではなく、全て一括に曜日を決めて、家庭訪問をするというような対応をしている。“わざわざ家庭訪問をしているのに、会おうとしない。なんて、失礼な子どもだ、親の躰がなくなっているのでは？”というような不登校の子ども達の対応以前の質問をする先生もおられる。子ども側から見れば、“今は混乱し、自分の自我を守るために、ひきこもっているのにどうして、勝手に刺激されるのか？”となり、増々、混乱や不信の感を強めていく結果になることも多い。せめて担当者なら、不登校の子ども達の心的状態をそれができないのならば、先生自らで勝手に結論を下したり、判断したりせずに子ども達の意志、気持ちを尊重して欲しい。その時、子ども達がアンビバレンツな感情であり、判断がつかなくなったら少し待つ余裕が欲しい。そして、子どもに直接かかわることができないときは親を支えて欲しい。親の話や悩みを聞くことで、目の前の親を支えるだけではなく、真剣に話を聞くことで、自らの人間としての幅を広げることができ、カウンセリングマインドを自然に身につけ

ていくことができるようになる。

地域社会が崩壊し、家族崩壊が進む中、学校教育こそが最後の砦であり、学校教育を再生することが“子どもの命”を守ることに繋がると、今感じている。

登校拒否研究会 平成3年からのあゆみ

○平成3年度○

平成3年8月21日～23日於ニッショーホール
第1回教師&専門家のための登校拒否研修会

後援 全国都道府県教育委員会連合会
立教大学社会福祉研究所

「精神医学と心理学の視点から」

愛知教育大学教授・精神科医 梅垣 弘

「激変する経済社会の立場から」

東北福祉大学客員教授・(財)統計研究会理事
事務局長 神谷 克巳

「子どもとの関わり実践教育」

教育研究所所長 牟田 武生

「登校拒否問題の現状と課題」

文部省初等中等教育局中学校課
課長補佐 坂内 宏一

「ハイテク時代の登校拒否」

長野大学助教授 小川 賢治

「登校拒否の理解と指導」

早稲田大学教授 東京都学校不適應検討委員会
委員長 小泉 英二

「総合的連携的实践」

登校拒否文化医学研究所 主宰 高橋 良臣
「病院のソーシャルワーカーから見た登校拒否」
慶応大学病院 医療ソーシャルワーカー
臼田 美智子

「臨床心理から見た家族」

立教女学院短期大学教授 滝口 俊子

「社会学からみた不登校問題」

大阪市立大学教授 森田 洋司

「登校拒否の理解・公と私の立場で」

文教大学教授 前文部省調査官 高橋 哲夫

○平成4年度○

平成4年8月23日～25日於カンダパンセホール

第2回“教師&専門家のための登校拒否研修会”

後援 全国都道府県教育委員会連合会
「登校拒否文化医学研究所・教育研究所

実践活動内容報告」

登校拒否文化医学研究所主宰 高橋 良臣
教育研究所所長 牟田 武生

「家族にとっての不登校の意味」

立教女学院短期大学教授 滝口 俊子

「登校拒否と発達課題」

新潟大学教授・新潟県登校拒否対策協議会会長
石郷岡 泰

「不登校への援助」ー心理臨床の立場からー

兵庫教育大学副学長 佐藤 修策

シンポジウム

精神医療の立場から

愛知教育大学教授・精神科医 梅垣 弘

学校教育相談の立場から

早稲田大学教授東京都学校不適應検討委員会
委員長 小泉 英二

民間実践教育の立場から

教育研究所所長 牟田 武生

「登校拒否問題の現状と課題」

文部省初等中等教育局中学校課課長補佐
坂内 宏一

「不登校児への相談援助活動」

東京児童問題専門相談室長・児童精神科医
上出 弘之

「心の時代の教育を考えるー学校社会の活性化に向けてー」

大阪市立大学教授 森田 洋司

○平成5年度○

平成5年8月23日～25日於ニッショーホール
第3回教師&専門家のための登校拒否研修会

後援 全国都道府県教育委員会連合会

「民間通所教室での実践報告」

教育研究所 所長 牟田 武生

「不登校児と「恥」の関係」

日本ルーテル神学大学講師 James Sack

「環境の変化と家族・地域・学校」

東京家政大学教授 樋口 恵子

「学校が好きになる教育を求めて」

全国進路指導研究会常任委員・国分寺市立第一
中学校教諭 尾木 直樹

シンポジウム 社会現象から見た学校と家族

社会調査の立場から

大阪市立大学教授 森田 洋司

家族心理の立場から

立教大学教授 庄司 洋子

社会心理の立場から

新潟大学教授 石郷岡 泰

「登校拒否の現状から見た対応策」

文部省初等中等教育局中学校課高等学校課教

科調査官 渡部 邦雄
「登校拒否の予防と初期的な対応」
愛知教育大学教授・精神科医 梅垣 弘
「児童相談所で扱う不登校児」
東京都児童相談センター所長・児童精神科医
甘楽 昌子
「不登校児童への児童福祉的対応」
厚生省児童家庭局育成課児童福祉専門官
文部省学校適応対策調査研究協力者
山本 保

○平成6年度○

平成6年8月23日～25日於ニッショーホール
第4回教師&専門家のための登校拒否研修会
後援 全国都道府県教育委員会連合会
「心因性の登校拒否への対応」
教育研究所 所長 牟田 武生
「登校拒否児の心情変容をもたらす援助指導」
ーシステム・プログラムの手法の実際ー
国際学院埼玉短期大学教授 金子 保
「登校拒否、東京都児童相談センター 治療
指導課での試み」
東京都児童相談センター治療指導課課長
森田 博

「登校拒否の理解と援助者の育成」
新潟大学教授・新潟県登校拒否問題対策協議会
会長 石郷岡 泰
シンポジウム 登校拒否の理解と援助者の育
成
家族と学校 福島大学教授 小野直広
教育センターと学校との連携
元新潟県立教育センター指導主事・新潟中央高
校教諭 岩野 宣哉
「登校拒否の現状と行政の取り組み」
文部省中学校課課長補佐兼生徒指導専門官
永山 賀
久

「不登校児童への児童福祉的対応」
厚生省児童家庭局母子福祉課母子福祉専門官
山本 保
「登校拒否の児童生徒への援助・指導」～その
効果的なかかわり方～
甲斐教育・心理研究所所長 甲斐 志郎
「精神医学としてのかかわりと臨床」
愛知教育大学教授・精神科医 梅垣 弘

○平成7年度○

平成7年度8月21日～25日
於ニッショーホールカダパンセホール
第5回教師&専門家のための登校拒否研修会

後援 全国都道府県教育委員会連合会
「いじめ・登校拒否、様々な分野からの分析
「いじめ・ひきこもり」取材を通して見えるこ
と
毎日新聞社社会部記者 野沢 弘
「不登校へのミクロとマクロの視点考察」
国立精神神経センター精神保健研究所
倉本 英彦
「登校拒否」子どもの体に何が起こったのか
熊本大学医学部 小児発達学教室教授
三池 輝久

行政の取り組みと分科会へのアプローチ
「登校拒否」現状と教育行政
文部省初等中等局中学校課生徒指導専門官
淵上 孝

不登校拒否の福祉的対応
厚生省児童家庭局家庭福祉課 主査 新保 幸男
「登校拒否」理解と援助者の育成
新潟大学教授・新潟県登校拒否問題対策協議会会長
石郷岡 泰
「いじめ・登校拒否」親と学校の連携とは
甲斐教育・心理研究所所長 甲斐 志郎
「登校拒否」親と子どもに対する具体的援助と
は
愛知教育大学教授・精神科医 梅垣 弘

分科会
A講座「登校拒否」理解と援助者の育成
石郷岡 泰
B講座「いじめ・登校拒否」親と学校の連携と
は 甲斐 志郎+親+体験者
C講座「登校拒否」親と子どもに対する具体的
援助とは 梅垣 弘・牟田 武生

○平成8年度○

平成8年8月21日～24日
於ニッショーホール・カダパンセホール
第6回教師&専門家のための登校拒否研修会
後援 全国都道府県教育委員会連合会
「21世紀の学校教育を考える」
「くらしを共にする全寮生活を通して、子ども
達の心に灯を」
ーいいところに目を、そして長い目でー
吉備高原学園高等学校学校長／元岡山県教育
センター所長 三澤 和昭
「いじめ・登校拒否問題、教育が問われている
もの」

日本教職員組合中央執行副委員長 西澤 清
「百年生きる地球人を育てる」
文部省高等教育局医学教育課長／前広島県教育長
寺脇 研
「シンポジウム～いじめ・登校拒否、学校再生

への道を探る」

吉備高原学園高等学校校長／元岡山県教育センター所長 三澤 和昭

日本教職員組合中央執行副委員長 西澤 清
文部省高等教育局医学教育課長／前広島県教育長 寺脇 研
司会（コーディネーター）NHK解説委員 齋藤 宏保

不登校の親／産業カウンセラー 藤原 保代
行政の取り組みと全体像としての登校拒否

「いじめ・登校拒否」その現状と対応策

文部省初等中等局中学校課生徒指導専門官 森 孝之

「不登校児童への福祉的対応」

厚生省児童家庭局家庭福祉課主査 新保 幸男
「現代型問題行動といじめ・不登校問題」

文部省「問題行動等に関する調査協力者会議」委員大阪府立大学教授 森田 洋司

「スクールカウンセラーの課題と実際」

（財）日本臨床心理士資格認定協会専務理事／龍谷大学教授 大塚 義孝

「分科会へのアプローチ+one」

「心因性（情緒混乱型）とアパシー型の違いと対応」A講座

登校拒否研究会幹事 牟田 武生

「子ども・親の心をとらえる教育相談とは」

甲斐教育・心理研究所 所長 甲斐 志郎

「登校拒否（含、いじめ）：状態像にあわせた対応を」B講座

新潟大学教授／新潟県登校拒否問題対策協議会会長 石郷岡 泰

「登校拒否とその理解、指導援助法」C講座

国際学院埼玉短期大学教授 幼児教育学科長 金子 保

「登校拒否の心的状態と病的状態像の違い」D講座

愛知教育大学教授／精神科医 梅垣 弘

分科会

A講座「心因性（情緒混乱型）とアパシー型の違いと対応」 牟田 武生

＝事例・臨床から学び再び実践へ＝

B講座「登校拒否（含、いじめ）：状態像にあわせた対応を」 石郷岡 泰

C講座「不登校の理解とその援助並びに研修をどう進めるか」 金子 保

＝一人一人にあった自ら登校できる援助マニュアルをどう考える＝

D講座「登校拒否の心的状態と病的状態像の違い」 梅垣 弘

○平成9年度○

平成9年8月21日～23日 於ニッショーホール第7回“教師&専門家のための登校拒否研修会”

後援 全国都道府県教育委員会連合会

「いじめ」「登校拒否」の現状と取り組み

文部省初等中等教育局中学校課生徒指導専門官 兼課長補佐 湊谷 治夫

「不登校」児童家庭福祉の立場から

厚生省児童家庭局家庭福祉課 児童福祉専門官 森 望

シンポジウム（オープンフロア方式）

「子どもの悩みを共感できる学校・家庭の真の連携とは」

いじめ・登校拒否を体験して

…子どもの立場から

子どもの「登校拒否」を通して見えたこと

…親の立場から

教師（学校）として

…会場の先生方

コーディネーター 牟田武生（教育コンサルタント）司会 増田ユリヤ（NHKリポーター）

「登校拒否、その理解と指導援助法」

国際学院埼玉短期大学教授 金子 保

「教育臨床における不登校などへの援助」

昭和女子大学文学部心理学科教授

平尾 美生子

「児童生徒のいじめ・不登校へのアプローチ」

新潟大学名誉教授 石郷岡 泰

「子どもの権利条約といじめ・登校拒否問題」

早稲田大学教授 文部 下村 哲夫

「いじめ～教育社会学的視点からの理解と援助」

大阪市立大学教授 森田 洋司

「不登校・心の葛藤の理解と援助」

愛知教育大学教授・精神科医 梅垣 弘

○平成10年度○

平成10年8月24日～26日於ニッショーホール第8回“教師&専門家のための登校拒否研修会”

後援 文部省

全国都道府県教育委員会連合会

教育新聞社

「復学できるようにするためには」

国際学院埼玉短期大学教授 金子 保

「最近の児童家庭問題と児童相談所」

厚生省児童家庭局企画課 児童福祉専門官

才村 純

「不登校問題等に対する教育行政の取り組み」

文部省初等中等教育局中学校課

生徒指導専門官 高橋 宏治

「若者達のひきこもりと対応」

(社) 青少年健康センター常任理事
(医) 北の丸クリニック所長 倉本 英彦
「教師と子どもの関係を見直す」

東京学芸大学教授 松村 茂治
「社会学から見たいじめ問題への理解と対応」
大阪市立大学教授 森田 洋司
「ひきこもりのメカニズムと対応」

教育研究所所長 牟田 武生
「児童生徒のストレスと心の健康」～いじめ・不登校問題を考える

愛知教育大学教授・精神科医 梅垣 弘
「いじめ・非行・不登校、子ども達の心のメカニズム」～違いと対応を考える

新潟大学名誉教授
新潟県スクールカウンセラー 石郷岡 泰

○平成11年度○

平成11年8月23日～25日於ニッショーホール
第9回「教師&専門家のための登校拒否研修会」

後援 文部省
全国都道府県教育委員会連合会
「不登校問題等に対する教育行政の取組み」

文部省初等中等教育局中学校課
生徒指導専門官 村上 尚久
「子どもをめぐる法律」

ー不登校・いじめ・学級崩壊ー
早稲田大学教授・筑波大学名誉教授
下村 哲夫

「子どものストレス状況と学校の取組み」
国立教育研究所生徒指導研究室長 滝 充
「最近の児童家庭問題と福祉的対応」

厚生省児童家庭局企画課児童福祉専門官
前橋 信和
「再登校の援助の在り方」

教育研究所所長・教育コンサルタント
牟田 武生
「シンポジウム基調講演／不登校時の子ども

の心理と援助法」
国際学院埼玉短期大学教授・附属教育相談センター所長 金子 保

「シンポジウム今、学校社会に子ども達が求めるもの」～どうしたら学校、教室にもどれるのか

調布市立第七中学校養護教諭 舟見 久子
茨城県立笠間高等学校教諭第2学年主任・生徒指導部教育相談(S C)担当 友部 右之

世田谷区ほっとスクール城山運営委員・指導員
小池 角次郎
教育研究所ケースワーカー 西村 公志

司会/NHK週刊子どもニュースキャスター
池上 彰

「発達のつまずきとしてのいじめ・不登校」
新潟大学名誉教授・仙台白百合大学教授

石郷岡 泰

「児童生徒のストレスと心身反応」

愛知教育大学教授・精神科医 梅垣 弘

「社会学から見た世界のいじめ、日本のいじめ」

大阪市立大学教授 森田 洋司

※講師の肩書きは講演当時のものです。過去の講義テープも取り扱っています。お問い合わせは事務局まで。

平成11年度第9回 教師&専門家のための登校拒否研修会 参加された皆様の声より

昨年のアンケートの中からいくつかのご意見を掲載させていただきました。皆様にご回答いただいたアンケートは各講師の先生方へ複写しお送りさせて頂いております。

運営に対するご意見などもご紹介させていただきましたが、事務局としても出来る範囲でご意向に添えるように努力していくつもりです。

「不登校問題等に対する教育行政の取組み」

文部省初等中等教育局中学校課
生徒指導専門官 村上 尚久

○ 文部省としての公的立場からの取組みの話であったが、それはそれとして、日ごろ、新聞、テレビ等の報道と交えて考えると分かりやすかった。質問が出来たらよかった。(千葉県)

○ やや早口だったが、要点がしっかりとまとまっていて分かりやすかった今後の方向性も見えてきた。(石川県)

○ 少しであったが、私見を語っていただいたのがよかった。(東京都)

「子どもをめぐる法律」

ー不登校・いじめ・学級崩壊ー

早稲田大学教授・筑波大学名誉教授下村 哲夫
○ ゆとりの時間と学力維持は同時に得られないというあたりまえのことに改めて気づかされた。というか、それをうかがって安心した。

○ 新学習指導要領の見解が興味深かった。文部省の不登校に対する見解、予防法、判例について申し越し詳しく聞きたかった。(千葉県)

○ 法律もからみ、分かりやすく話していただき、知らなかったこともあり、大変良かったです。ぜひ来年もお話をお聞きしたい。

(山形県)

- 特に質問への的確な答えが良かったです。30人学級への動きより専科加配の充実へという文部省の考えをおっしゃってくださいましたが、出来るだけ早くそうなって欲しい。(滋賀県)

「子どものストレス状況と学校の取組み」

国立教育研究所生徒指導研究室長 滝 充

- 予防教育の生徒指導の重要性を感じることができた。ピースメソッドに大変興味を持った。是非取り組んでみたい。(愛知県)
- 話がわかりやすかった。先生のお考えのように予防が大切だし、学校の体制をしっかり考えていくことはやはり必要だと思いました。一人では何も出来ません。当たり前のことをあらためて確認したような気がします。(福岡県)
- ピースメソッドを利用した授業研究をしてみたいと感じました。生徒の多様化以前に教員の多様化が問題ではないでしょうか。学校を変えるには生徒を変えるのではなく教員を変えるべきでしょうね。(栃木県)
- 先生の本を読んでみたいと思います。今の学校には、対立しない、皆を巻き込む、長期的な方法が必要だと思います。自分の立場(心の教育相談員)では動きにくいですが、使えるやり方を考えたいと思います。(広島県)

「最近の児童家庭問題と福祉的対応」

厚生省児童家庭局企画課児童福祉専門官

前橋 信和

- たくさんの資料を用意してもらってよかった。特にメンタルフレンド事業に関心を持った。質問の時間が取れるとよかった。(群馬県)
- 今、行政の方ではどうなっているのかが何となく分かりました。ただ、虐待に合っている子を何となく感じてはいるのですが、家庭になかなか踏み込めない日本の土壌があるように思います。(神奈川県)
- 児童相談所の取り組み範囲がある程度分かりました。積極的な取り組みとしてメンタルフレンド事業についての効用を認識しました。(茨城県)

「再登校の援助の在り方」

教育研究所所長(民間施設)

教育コンサルタント 牟田 武生

- 具体的な内容だったため理解しやすかった。

(栃木県)

- 明るい不登校について聞いたみたかったのですが、時間が短く残念でした。(山梨県)
- 具体的な指導例を話され、現場での悩みに非常に近い内容でとてもためになった。(宮崎県)
- とても噛み砕いて内容を話していただき、初めて参加して現場でも直接生徒と接しているものにとってはとっても有意義な講話でした。学校の担任の先生方にも(多くの方に)聞いていただきたかった。(長野県)

「シンポジウム基調講演／不登校時の子どもの心理と援助法」

国際学院埼玉短期大学教授

附属教育相談センター所長 金子 保

- 時代は繰り返されるのでしょうか。よく分かりました。金子先生の子どもに対する愛情と教育に心から感動いたしました。時折横切る甘えかと思ってします自分と何とかしなくてはと思う自分と入れ代わりすることも事実です。(広島県)
- 先生の講演は静と動があり、非常に具体性があり参考になりました。私自身2人の娘を持つ父親であり、高校の教員でもありますが、好きで、遊んでくれて、怖い父をもう一度見直し返りの新幹線の中で先生のお話しを復習して家に入ろうと思いました。
- ジェスチャーや言葉の優しさがいかに大切かがよく分かった。接し方により子どもが変わってゆくこと、そして基本プログラムを学校に帰って実際にやってみようと思う。勉強になりました。(群馬県)
- とても集中して聞くことの出来たお話しでした。具体例(かかわり方)(言葉かけの仕方)が多く、実践に役立たせたいという意欲がわく内容でした。(栃木県)

「シンポジウム今、学校社会に子ども達が求めるもの」～どうしたら学校、教室にもどれるのか

- 色々な問題があると思いますが、出来れば体験者の方に複数来ていただき、その方々の話をもっと聞ければと思います。(富山県)
- 不登校抱える問題の幅広さが改めに再認識された。参加された方々の課題が意見の中に見られてよかった。もっともっとフロアからの意見を求められたらどんなものだろうか。(宮城県)
- 体験者のFさんの言葉が一つずつ残ってい

る。体験を通して自分を見つけ、目標を持って生きている姿が素晴らしかった。教師として不登校がその子にとって無意味なものにならないように出来る限り努力して欲しい。(岡山県)

- Fさんのお話しにおもわず聞き入ってしまいました。体験者の話しが聞けて本当に嬉しかったです。(大分県)

「発達をつまづきとしてのいじめ・不登校」

新潟大学名誉教授・仙台白百合大学教授

石郷岡 泰

- 子ども達の乳幼児期の母親との関係が大切なことがよく分かった。肌とのふれあいの他に具体的な接し方(発達課題)を明らかにしていただけることを期待しています。(静岡県)
- 不登校の子どもの心の動きが分かりました。参考にして学校でも生徒と接したいと思えます。(愛知県)
- 私にとっては一番スット入ってくるお話しでした。特に、前半は、不登校のバックグラウンドを整理していただき、私の頭もかなり整理できたと思えました。フロアの質問と先生のお答えも、とても大切なことが明らかになりました。(宮崎県)

「児童生徒のストレスと心身反応」

愛知教育大学教授・精神科医 梅垣 弘

- 分かりやすい例で(高校生の話、小学生の話など)よく理解できました。ストレスと一口に使っていますが、詳しいことが分かってよかったです。(福岡県)
- きわめて分かりやすく、具体例も豊富に取り入れ、話し振りもはっきりしていてよかった。(群馬県)
- 具体的な例はあり、ストレスの原因は理解できましたが、事例の中でどう学校、家庭が対処しのか教えて欲しかった。(鳥取県)
- 近頃、精神病理学の知識が必要と感じることが多いのでためになった。(東京都)

「社会学から見た世界のいじめ、日本のいじめ」

大阪市立大学教授 森田 洋司

- 現在の日本のいじめについて非常に納得できました。しかし、そう変化していく社会の中でこの意識を持たせるのは逆にとても難しいと思えました。(埼玉県)
- 新しい角度から光を照らしていただき、今まで見えなかったものが見え始めた。(東京

都)

- 力強い講義、具体的な事例をダイレクトな言葉で語ってくださり、大変参考になり、新しい見方を教えていただきました。(千葉県)
- 「見てみぬふりをするな」をモットーにクラス担任をしてきました。言うとは生徒はシラーとしました。それでも何度も何度も言ってきた虚しさ、経験が、救われた思いでした。(神奈川)

平成11年8月23日～25日

第9回教師&専門家のための登校拒否研修会

決算報書

収入の部(9月10日現在)

①受講料(有料429名)	6,666,000円
②預金利息	323円
③前年度繰越金	808,450円
④平成10年度決算終了後活動費	100,000円
合計	7,574,773円

支出の部(9月10日現在)

①ホール借料(機材借料含む)	1,439,244円
②講師お礼(150,000×1、100,000×6、50,000×5、20,000×1)	1,020,000円
③講師交通費	135,000円
④スタッフ用役費及び交通費 (時給800円×1050時間/人)	1,004,000円

⑤ボランティア交通費	146,889円
⑥食事代 (講師・ボランティア昼食、打ち合せ費用含む)	204,856円
⑦郵送費	1,536,994円
⑧印刷費	

内訳	パンフレット	734,110円
	封筒	207,950円
	講義ノート	550,000円
	他印刷物(受講証他)	75,140円
	ラベル出力・名簿管理	205,000円
	消費税	88,609円

⑨雑費(源泉預かり、事務用品費を含む)	257,886円
⑩事務諸経費(電話代等)	210,000円
⑪支払い手数料	23,330円

⑫第9回研修会参加者への報告及び研究会通信発送費	300,000円
	100,000円
合計	8,239,008円

以上の通り相違ありません。

※収入－支出＝△664,235 円は主催団体の立て替 7,574,773 円－8,239,008 円＝△664,235 円)

編集後記☆☆☆☆☆

◇毎年多くの先生方にご参加頂いてる登校拒否研修会。毎年、少しでも、みなさんが子どもに対する理解を深め、その結果、より多くの子どもたちが学校なり、社会なりにもう一度参加していくことができたり、不登校にならずに済んだりするようになると願いながら、私がこの研修会を手伝わせて頂くようになって、早4年になります。

4年という短い間ですが、この間、様々なことがありました。そして、それらのことを考えるとき、今、本当に子ども達を取り囲む状況が難しい、子どもたちにとって、生き難いものであるということを実感しています。

日本という国は、経済を最優先に考えて国が成り立っています。経済効率、効果、そのようなことが、全ての判断基準の中に入り込んでいます。それは悪いことではありません。ある意味、現代社会を生きていくのに必要なことでもあります。しかし、今の日本では子どもが大人のそうした考え方の中心に置かれているといってもいいのではないのでしょうか。

日本の子どもは生まれる前から、(大人にとって)より効率よく、わずらわしくなく、そしてスマートに賢く育つよう、望まれています。そしてそのために様々な教育産業などが用意されていたりします。大人は、子どもに乱されない自分の生活を理想とします。もちろん、それはそうでしょう、でも、子どもは未熟な未完成の生き物、人間であるということが、ここでは忘れられている気がします。

人間が成熟するには、効率だけではなく、無駄が必要です。失敗から学ぶことが大きな意味を持つということは何の大人も経験上から知っているはずですが、しかし、大人がそれを経験させながら、教えていけない限り、子ども達はそれを知りません。

「ああしなさい、こうしなさい」と大人が正解だと思うこと(必ずしも本人にとって正解ではない)をいうことは、効率的かも知れません。けれども、無駄をしながら思考をし、正解を導く方法を学んでいくという、大切なプロセスが欠けてしまいます。

未熟な子どもの周りでは子どもが喧嘩した時、泣いて駄々をこねた時など、些細なことで様々なトラブルが発生します。こうした時、怒ってくれる人、諭してくれる人、慰めてくれる人、様々な形で関わりを持つとしてくれる人が

社会の中で減ってきてしまっています。また、周りの大人にそういう、立ち止まる余裕、子どもが気づくまで待つ余裕が無くなってきているそんな感じがします。その代わり、見て見ぬ振りをする、その場だけが静かになるような立ち居振舞いをしてしまう。しかし、それでは子どもたちの心の情緒は育ちません。大人も一緒に無駄を繰り返しながら、育つのを待つ必要があるのです。

また実際、現在の低迷しつづける日本経済社会において、ゲーム、通信、パソコンなど、隆盛を極めているものは、主に子どもをターゲットにしているもので、成長期にある価値観を育てる意味で重要な時期にある彼らに対して、刺激を求めた大人も一緒に楽しめるような、設定になっているようなものも、少なくありません。こうした内容のものに、日常多く触れ、そして人間的な関わりが減ってきている現状では、子どもたちの心の中に育つものが現実感のない、殺伐としたものになってしまいます。

また、間接的なコミュニケーション手段としてのネット、メールが、互いに心を交わすことを苦手とする人にとって結びつきを感じやすく、また、直接的に関わる事がないという、彼らの人間関係手段として人気を集めている。しかし、世間を知らない、身を守ることを知らない子どもたちが、こうしたネット、メール、電話などを通じて危険にさらされるような事も起きています。

大人が子どもを様々な弊害から守るということ断固として行わなければならない、そんな気がしてなりません。

心の教育、人間を育てる教育は学校の中だけで行われるべきものではない、そう確信しています。(田村)

◆10回を数えた「教師&専門家のための登校拒否研修会」皆様のご支援に支えられつつよくここまで来られたと感心している。研究会立ち上げ当初からかかわってきた私は少々お疲れモードのようだ。編集後記に向き合って、何度も書いては消し、書いては消しを続けたが結局エネルギーが尽きた教育観は出てこなかった。何とかリフレッシュしなければ・・・。

研修会に参加して下さっている先生方とはとても熱心な方々だと思います。先生方でもそんなことはありますか？でも疲れますよね。何かストレス解消のいい方法があったら教えてください。(西村)